

報告タイトル: イギリスのムスリム女性の学校適応: 教育をめぐる交渉戦略

Title: School Adaptations of Muslim Women in Britain: Negotiation Strategies on Education

発表者: 安達智史 (近畿大学)

Presenter: ADACHI Satoshi (Kinki University)

キーワード: 女性ムスリム、教育意識、交渉戦略

Keywords: Muslim women, attitudes on education, negotiation strategies

ムスリムの社会統合は、イギリスの最も重要な社会的・政治的課題の一つとなっている。とりわけ、「イギリス生まれの (home-grown)」ムスリムにより実行された 2005 年のロンドン同時爆破テロは、イスラーム過激主義のイデオロギーがイギリス社会を蝕んでいるという認識を広く浸透させることとなった。そのような中、学校を中心とした教育システムは、社会統合の最前線に位置づけられ、政策的介入の対象となっている。たとえば、労働党政府は、2006 年に、異なる背景をもつ生徒同士の連帯、民主主義や寛容といった価値、そしてイギリス人としてのアイデンティティ (=Britishness) の共有を目的とした「コミュニティの結束」の義務を学校に課した (安達 2013)。それは 2005 年のテロへの一つの反応であり、イギリス生まれのムスリムのより積極的な包摂を意図するものであった。また、2014 年 3 月には、イギリス第二の都市バーミンガムのムスリム集住地域の学校が、イスラーム過激主義の思想により乗っ取られつつあるという告発文が地元の新聞社に届くという、いわゆる「トロイの木馬」陰謀事件が起こった。それに対して、政府は大規模な調査を実施し、そうした告発が一部事実であるとし、イギリスの価値の共有を求め、学校への介入をおこなっている。

ムスリムの教育システムへの統合をめぐる問題は、とりわけ女性と密接に結びつけられ論じられている。たとえば、イギリスを含むヨーロッパのスカーフ/ヴェール論争では、女性の自律性を否定するイスラームの伝統が、民主主義的価値の育成を目的とする学校で問題を引き起こしていることが問題視された。その際、スカーフやヴェールは、彼女たちの身体を規制する家父長的な権力を表象するものにとらえられた。イスラーム過激主義の女性への影響もまた、深刻な問題となっている。それは、2015 年 2 月、ムスリムが集住するイースト・ロンドンの一地区にある「ベスナル・グリーン・アカデミー」の 3 人の女子生徒が、「イスラーム国」に参加するためにシリアに渡航するという事件が報じられて以降、改めて議論されるようになった。これらの少女は、イギリスに生まれ育ち、学校で教育を受けながらもその価値を共有することなく、ムスリム・コミュニティの隔離化された空間の中で過激な思想を身につけることになったと、一部の人々により信じられている。

こうしたステレオタイプ的な見方に反して、多くの統計データや先行研究は、今日のイギリスの女性ムスリムやその家族が、教育に高い価値を置き、制限がありながらも教育システムへの参与を実現していることを示している (Husain and Bagguley 2007)。過去 25 年間のイギリスにおける教育機会の向上の中で、多くのムスリム (バングラディッシュ系、パキスタン系) 女性は成績を向上させ、高等教育へのアクセスを実現している。ところが、従来の研究は、もっぱらアジア系というフレームから問題をとらえるため、宗教としてのイスラームが教育に果たす役割については、——その重要性は指摘されながらも——十分に論じてこなかった。だが、イスラームと世俗社会における教育との関係について明らかにすること

なしに、今日のイギリスのムスリム女性の教育／社会システムへの統合を理解することは不可能である。そこで、本稿は、ムスリム女性の教育をめぐる意識を分析することで、彼女たちの教育システムへの統合のあり方やそのための戦略について描くことを目的としている。

本報告が用いるデータは、2014年2～3月および2015年2月に、イギリスのロンドンのタワー・ハムレット地区において実施された、34名の女性ムスリムを対象にしたインタビュー調査をもとにしている。調査は、同地区に位置するあるモスクのミーティング・ルームにて、1～3名を一組とし、各80～120分の時間でおこなわれた。年齢は、10代が12名、20代が16名、30代以上が6名である。エスニシティは、アジア系が28名、アフリカ系が1名、混血系が5名である。インフォーマントのほとんどは移民第二世代（23名）であるが、第一世代も1名、第三・四世代も10名いる。インタビュー・データは録音され、文字起こしされた上で分析がなされた。

分析の結果、下記の点が示された。第一に、インフォーマントの多くは教育に大きな価値を認め、高等教育への参加に対して高いアスピレーションを有している。彼女たちは、労働市場へのアクセス、家族からの自律、そして子どもの教育といった様々な側面から教育を高く評価し、その追求をおこなっている。第二に、そのような教育へのアスピレーションは、両親の学歴や社会階層の低さにもかかわらず、維持されている。インフォーマントの両親は、移民としての背景ゆえに、子どもに対する具体的な教育支援は困難な状況であった。それでも、インフォーマントの両親は、総じて子どもの教育に積極的であり、精神的あるいは間接的な支援をおこなっていた。だが、第三に、親や親族、コミュニティからの支援は、2000年代以前に義務教育を受けた層において容易に期待できるものではなく、彼女たちは、自身の努力や限られた情報ネットワークの中から教育資源を発見し、教育システムへの継続的な参加を目指していた。それに対して、第四に、より若い世代において、そうした教育資源はすでに周りに存在しており、そのことが、家族との将来をめぐる交渉において優位に立つことを可能にしている。第五に、インフォーマントは、イスラームの教義を教育へのアクセスを正当化するための手段として戦略的に用いている。彼女たちは、保守的なジェンダー規範を文化に帰属させることで、イスラームをよりリベラルで、平等主義的なものとして再定義している。そうすることで、結婚（生活）をめぐる伝統的なジェンダー規範をイスラームの観点から否定し、イスラームの「知識」をめぐる伝統を強調することで、教育や労働市場へのアクセスを正当化している。

先行研究では、アジア系の教育文化が中流階級のそれと近似していることや、女性ムスリムが低い階層に属しているにもかかわらず、近年、相対的に高い教育達成を実現していることが指摘されていた。それに対して、本研究は、その点を具体的な事例をもって跡づけることとなった。また、信仰が教育やキャリアをめぐる意識や戦略に及ぼす働きについて議論したことは、本稿の重要な成果である。

#### 参考文献

- 安達智史, 2013『リベラル・ナショナリズムと多文化主義：イギリスの社会統合とムスリム』  
東京：勁草書房。
- Hussain, Yasmin and Paul Bagguley, 2007, *Moving on up: South Asian Women and Higher Education*, Stoke-on-Trent: Trentham Books.